

映画『アリスのままで』が問いかけるもの

(2017/12/1)

三浦 幸廣

『アリスのままで』というアメリカ映画がある。50歳・女性の大学教授アリスが言語学の研究者として活躍していたある日、若年性アルツハイマーであることを告知される。「まさか自分が」と、とまどいつつもアリスは冷静に病気と向き合い、生きようとする。しかしその思いを嘲笑うかの様に病気は静かに、しかし確実に進行する。アリスは少しずつ少しずつ変わってゆく。「おかしい行動と言葉のせいで、他人の自分を見る目が変わり、自分自身も自分を見る目が変わる。奇妙で無能力で滑稽な存在になってしまう」というように。

アリスが勤務する大学では学生から、教師について評価を求めるシステムがある。その年のアリスに関する評価には「前回と全く同じ内容の講義を繰り返す」などの奇妙な行動が羅列されていた。事態を重視した学部長はアリスに休職を勧める。アリスは授業から身を引き、研究室で、かつてそうであった自分を取り戻そうとする。しかしアリスの思いを無視するかのよう、時の経過が記憶を奪ってゆく。

夫と三人の子供たちはアリスに寄り添い、アリスを励ます。だが病気の進行は家族間にいくつもの対立を引き起こす。例えばもうすぐ双子を出産予定の長女は、自身がアリスからアルツハイマー陽性の遺伝子を受け継いでいることを知り、それが生まれ来る子供へ再び遺伝するのでは、との恐怖に苛まれる。長女は母アリスを責める。若年性アルツハイマー病が遺伝する確率は「陰性・陽性」半々であるからだ。

長々と映画の粗筋を書き連ねたのには理由がある。その理由とは7月に大宮で開かれた「いきがい大学・公開学習」での出来事といくつかの点でこの映画が重なるからだ。

「いきがい大学・公開学習」での講演は『大人しく老いてなんかられない』というテーマだった。女性の講師は歯切れ良い口調で講演を開始した。講演が順調に進み、残りあと15分程という時だった。突然「あの出来事」が起きたのだ。今語ったばかりの内容と、全く同じ内容のことを講師が再び語り始めたのだ。テープレコーダーでも聴いているかのようなだった。「出来事」が起きての数分間、聴衆は怪訝な表情を浮かべつつも「これは講演テクニックの一つだろう」くらいに受け止めていたはずだ。ところがそれが延々と続き、さらには話の節目、節目に入れ込まれたジョークさえもがまったく同じであった。この辺りから会場がザワつき始め「その話はもう聞きましたよ」と甲高い声で怒鳴る女性が現れた。私の周囲でも「こんな話、聞いてられないよ」と嘲笑を浮かべる人、あきれ顔で会場を後にする人が続いた。講師の奇妙な行動に会場は騒然となった。

その時私は、会場の風景を眺めながら映画『アリスのままで』の二つのシーンを思い出していた。ひとつは大学の教室で「その講義は先週聞きましたよ」とアリスを詰問するかのよう、に発言する学生のシーン。もう一つは認知症看護会議でアリスが、患者の立場から認知症

の苦しみ、恐怖、苦悩、それでも生きようとする思いを淡々と語るシーンである。このシーンでアリスは、準備した原稿を一行読む度に、読み終えた一行をマーカーで塗りつぶしていく。そうしなければアリスは、今読んだばかりの行を忘れて再び同じ行を読んでしまうからだった。

本日はお招きいただいて光栄です。

詩人エリザベス・ビショップは「無くす技を覚えるのは簡単。多くの物が失われるのは災いではない」と書きました。

私は詩人ではなく若年性アルツハイマー病です。そして「無くす技」を日々練習しています。方向感覚を無くし、物を無くし、眠りを無くし、そして記憶を無くしています。

私の人生は記憶に満ちています。記憶は私の最も大切な宝になりました。夫と出会った夜、自分で書いた教科書を手にした日、子供が生まれ、友人ができ、そして世界を旅した日々。

私が人生で蓄えた全てが、努力して得た全てが、剥ぎ取られていくのです。想像するように、あるいはご存じのように地獄です。もっと悪くなる。

前とは変わってしまった人間をどう扱うのか？ おかしな行動と言葉のせいで、人の私たちを見る目が変わり、私たち自身も自分を見る目が変わる。奇妙で無能力で滑稽な存在になってしまう。

でもそれは私たちではない。私たちの病気なのです。病気であるならば原因があり進行もする。治療もできるかもしれない。最大の願いは私の子供たちが私のような状況に陥らないこと。

私はまだ生きています。生きているのです。心から愛する人がいて、やってみたい事がある。物を忘れてしまう自分に腹がたつけれど、喜びと幸福に満ちた瞬間が今でもあるのです。

私が苦しんでいると思わないでください。私は苦しんではいません。闘っているのです。世界の一部であろうとして。かつてそうだった自分であろうとして。

だから瞬間を生きています。瞬間を生きること、それが私のできる全てなのです。

自分で責めないで。「無くす技」が上達しても自分を責めないで。

でも今日のこの記憶は持ち続けていたい。いずれ失われるのは分かっています。それは明日かもしれない。でもここで話ししていることは大きな意味をもつのです。かつて私が言語学に情熱を燃やしたように。

これはアリスの講演記録である。大学から退いたある冬の日、一人自宅で窓辺の椅子にもたれかかりながらアリスは「自分の病気がガンだったら良かった。恥ずかしくないから」と独り言をもらす。私はこのシーンを見ると涙を流してしまう。アリスや女性講師の向こうに明日の自分が透けて見えるからであろうか。それとも騒然となった公開学習のあの時、女性講師に力一杯の拍手を贈ることができなかった事が悔やまれるからであろうか。

《ご参考まで》

・拙文では「アルツハイマー病」という言葉と「認知症」という言葉を併用した。専門書によれば認知症という症状を引き起こす病気としてアルツハイマー病、脳血管性認知症、レビー小体型認知症などがあるが、この三つの病気だけで認知症患者の80%を占めると記されている。(NHK 厚生文化事業団冊子より)

・映画『アリスのままで』は、全米ベストセラー小説『静かなるアリス』の映画化である。アリス役を演じたジュリアン・ムーアはアカデミー賞で主演女優賞を受賞。史上初の世界6大映画祭「主演女優賞」獲得女優となった。